様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０３０４

研究課題名（和文）Diversity in Archaeology and Cultural Resource Production in Japan

研究課題名（英文）Diversity in Archaeology and Cultural Resource Production in Japan

研究代表者
ＥＲＴＬ　ＪｏｈｎＪｏｓｅｆ（Ertl, John Josef）

金沢大学・外国語教育研究センター・准教授

研究者番号：３０５０７３８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ケーススタディに基づいて、考古学と文化資源の生産の多様性を研究する多面的な手法を発展させることにある。初めに、考古学の教育と研修についてである。次に、考古学調査の実践がある。最後に、考古学知識の解釈と活用がある。ケーススタディは石川県雨の宮古墳、岩手県御所野遺跡、奈良文化財研究で調査した。考古学が内在する多様性に着目し、文化資源生産のモデルを開発した。第一に、解釈の多様性は、オーサー、オーディエンスと解釈の場面の多様性に注目した。第二に、参加者の多様性は、文化遺産活動に参加するアクターとネットワークの多様性にある。最後に、情報の多様性は、データの非整合性に関する理解の多様性である。

研究成果の概要（英文）：This project developed a multifaceted approach to the study of diversity in archaeology and cultural resource production focusing on case studies in Japan. Three main themes were: 1) the education and training; 2) the practices of archaeological investigation; and 3) the interpretation and utilization of archaeological knowledge. Case studies examined archaeological research and heritage utilization at Amenomiya Kofun in Ishikawa Prefecture, Goshono Site in Iwate Prefecture, and Nara National Research Institute for Cultural Properties. The model of diversity developed includes Interpretative Diversity (the complex relationship between authorship, audience, and setting); Participatory Diversity (the network of actors engaged in cultural heritage activities); and Data Diversity (the challenges relating to incommensurability of data). The results of this research include several published papers, an edited book, and presentations at domestic and international conferences.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学　考古学　多様性

１．研究開始当初の背景
「考古学的知識」は発掘調査や実験室でのデータ分析など、科学的な営みから生み出され、遺跡の観光開発や遺物の博物館所蔵のために「文化資源」へと変換され、国民性やエスニック・アイデンティティの形成に寄与する。「考古学とナショナリズム」という分野では、個々の国の社会的・政治的・経済的コンテクストによって、考古学の実践が異なることに注目する。科学としての考古学がどのようにナショナリズムと関係しているかを問い、考古学の「誤用」が、しばしばエスニック・マイノリティや近隣国家との軋轢を生むことを問題化する。

２．研究の目的
本研究の目的は、民族誌的手法によって、「考古学的知識」が生産される多角的なプロセスを調査することである。本研究では、日本についての研究を通して、日本の民族的同質性と文化的安定性という「神話」を、戦後の考古学がどのように支えてきたか、また、現代社会にどのような影響を与えているのかについて注目する。

３．研究の方法
本研究は、日本のケーススタディを元に考古学の多様性と文化資源の生産について多面的なアプローチを行う。主要なテーマは、1)教育と訓練、2) 考古学的発見の実際、3) 考古学的知識の解釈と活用、の 3 点である。石川県の雨の宮古墳、岩手県の御所野遺跡、奈良文化財研究所での考古学調査と遺跡の活用を事例とする。

４．研究成果
考古学が内在する多様性に着目し、文化資源生産のモデルを開発した。考古学の実際における相互に関連する以下の、3 つの側面について、出版・発表を行った。

Interpretative Diversity（解釈の多様性）：
多義性の概念を詳述することで、一時的あるいは経過中の解釈だけでなく、解釈する立場(オーサー)、受け取る側（オーディエンス）、その背景の複雑な関係を明らかにした。これにより、考古学的発見がなされる以前、最中、以後にどのように解釈されるのか、そして新しい結論への方向転換があらゆる段階においてどのようになされるのかを明らかにした。

Participatory Diversity（参加者の多様性）：
まず、文化遺産活動に参加するアクターに「人間」と「非・人間」を含む多様性を指摘し 、ハイブリッド・コレクティブの概念を援用し、文化遺産に関わる活動におけるさまざまなアクターの共同ネットワークの重要性を示した。

Data Diversity（情報の多様性）：
考古学は、多領域の研究を含み、専門家の共同の要請が高い分野であるために、データに非整合性が生じる。本研究では考古学的データの非整合性の多様性を指摘できた。

この３つの多様性のモデルを援用して、雨宮古墳をケーススタディとして取りあげたものが以下の論文である。

第二次世界大戦終了後、考古学が日本人の民族的ルーツを語る権威ある学問とされてきた。国の政治や社会の流行、そして多様なイデオロギーが関連した学問分野として、考古学者による日本人の民族的出自の記述は過去一世紀の間に大きく変遷してきた。本論は観光地としての考古学博物館と公園、とくに石川県能登半島にある雨の宮古墳の壮大な埋葬塚の設立に注目し、「考古学的遺跡」が「観光地」へと転換していくなかで、それぞれ異なった役割と動機を持つ主体のネットワークがどのようにかかわっているかを明らかにする。
本論は多文化主義論の枠組みの中で分析される。多文化主義の議論でよく取り上げられるような日本人と非日本人の関係について論じるのではなく、「日本人」（日本の歴史、日本の文化）というカテゴリーが考古学の文脈でいかに作られてきたかを検討する。雨の宮の事例では、考古学的知識の生産は多面的な事業であり、日本の歴史や文化遺産を作り出すことは必ずしも人々をマスターナラティブに同化させるわけではなく、別のナラティヴやアイデンティティ、過去を構築することを可能にする形成的な基盤となることが明らかにされる。
戦後日本の考古学で特筆に値するのは、専門家（考古学者）、政治家、メディア、行政機関、素人のネットワークによる協力的参加に特徴づけられるようなものとして表現されることである。雨の宮古墳についての本研究は３名の個人に代表される３つのタイプのアクターを調査する：
（1）発掘・分析・解釈を監督する考古学者、（2）教育、保存、遺跡利用を管理する行政担当者、そして（3）発掘の補助に駆り出される地元住民。その３つに焦点を当ててアクターの役割とネットワークについて明らかにする。
本論は雨の宮古墳の発見と変遷におけるこれらの人々とその役割を３部構成のナラティヴとして提示する。はじめのセクションは、古墳発見以前、千年以上にわたり雨乞いの神を祀る雨の宮神社の場所とされた雨の宮の歴史を考察する。ここではこの遺跡にかかわる考古学者の一人が偶然神社の宮司でもあることから、科学的歴史調査を行う傍ら、遺跡の宗教的・神話的重要性を伝える二重の役割を担うことを紹介する。第２のセクションは雨の宮の世俗化の過程をたどり、古墳の

頂上から神社を移したこと、そして遺跡を公園として作り直したことを取り上げる。本セクションの中心人物は鹿西町教育委員会の文化財責任者として働く町の行政官である。この人物の役割は多面的であり、文化庁と連携しながら「国指定重要文化財」の発掘と復元を実施し、同遺跡を地域興しキャンペーンとして利用することにも関わる。第３のセクションでは雨の宮発掘にも携わり、雨の宮のある集落、西馬場の今昔史を執筆した地域住民に焦点を当てる。公的な遺跡記録と町史では、雨の宮は国または町の歴史として位置づけられているが、当今昔史は雨の宮を「信仰」の項目で紹介する。

雨の宮は本論で示すような発掘調査などの活動によって後戻りのできない変遷を経た。その物理的な地形は雨の宮神社、相撲の土俵、宗教的建造物のあった木の茂る丘の上から、壮大な墳墓、手入れされた芝、バーベキュー用テントのある野外公園と変貌した。雨の宮は日本の国家の歴史的起源の中に取り込まれるようになり、その意味づけは変化を遂げた。また、かつては相撲試合の場所として使われていた場所も、文化財として住民の利用が制限されたため社会的文化的地形が変化してしまった。考古学的発見が引き起こすこれらの変化は、様々な異なるナラティヴの表出を可能にすることを本論は明らかにする。すなわち、考古学的発見の過程では、単に人々を国家のマスターナラティブに同化させ文化的・民族的表現が制限されていくのではなく、文化的多様性を表現、あるいは、新しく創造していくような文脈を提供しているといえる。

またこの研究手法を従来にないものであり、新しい研究ネットワークが成果として生まれた。

第１に、考古学の社会的な影響と考古学から社会へ与える影響を研究するためのセミナーを開催し、多領域の専門家が参加した。

考古学と現代社会の関係、特に考古学と考古学に触発された諸活動は現代社会とどのような相互関係にあるのか、考古学的発見がどのようなプロセスで「文化資源」として変容していくのかを研究する課題ユニットを立ち上げ、2013 年 11 月から 2015 年１月にかけて、文化資源学セミナー「考古学と現代社会」シリーズを５回にわたり開催した。第１回「縄文住居復元と史跡公園」、第２回「歴史復元画と考古学」、第３回「現代『日本』考古学」、第４回「多様性・持続可能性と考古学」、第５回「さよなら、まいぶん」で、２名の発表の後、対話の時間を設ける構成で行った。
http://crs.w3.kanazawa-u.ac.jp/unit/subject/unit_subject_06.html

第２に、研究の成果として生まれたネットワークをプロジェクト段階にまで発展させた。以下が研究プロジェクトである。

国立民俗学博物館と共同で、考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究を行うグループを立ち上げた。その研究の目的は、以下である。

考古学は一般に過去についての科学的な研究と捉えられている。しかし同時に、考古学的知識や出土品が、時に観光資源として利用され、国家・民族をめぐる政治と結びつくように、現代を形作る実践的な学問でもある。この「科学としての考古学」と「社会実践としての考古学」の間の緊張関係をめぐって、考古学者も、植民地主義やナショナリズムの歴史との関わり等、考古学の倫理ついて内省的な検討を始めているが、それらはまだ考古学内部にとどまっている。本共同研究では、考古学的知識が作られ、消費される、その多様なあり方を検証することによって、考古学がどのように社会関係や人々の世界観を形成し、変化させ、新たな景観をも作り出しているのかについての広範な理解を目指す。

そのために、次の３つの視点から複数フィールドにおける考古学的実践の民族誌・歴史的研究を行う。

（1）考古学的知識・技術習得のプロセスは、どのように個人のものの見方、コミュケーション、行為に影響を与えているのか。(2) 発掘現場やラボで、出土品などのモノはどのように考古学的データに変換されるのか。（3）考古学は遺跡観光、国家・民族の歴史の修正、社会運動にどのような影響を与えているのか。

２０１６年度は、１８人の多領域の専門家を交えて研究会を開催する予定である。

また、研究成果として。イギリスのセインズベリー研究所との共同研究を目指し、金沢大学と協定を結んだ。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① Ertl, John, 考古学の現在を掘る, 民博通信, 査読なし, 152 巻, 2016, 10-11。
② Ertl, John, 縄文文化の「真正性」, 縄文ファイル,査読なし, 222 巻, 2016, 4-6。

〔学会発表〕（計８件）

① Ertl John, Prehistoric Building Reconstructions in Japan: The Politics of Reconstruction in the Jomon Period Sites Bid for World Heritage Inscription, Theoretical Archaeology Group Bradford 2015（2015/12/14～16)、イギリス。
② Ertl John, Professional Vision and Speech Communities in the Archaeology of Japan: Toward a Framework for Under-

standing Diversity in Cultural Resource Production、Anthropology of Japan in Japan（2015/11/28～29)、奈良県。
③ Ertl John、Overview of Ethnography of Archaeology、考古学の民族誌（国立民族学博物館ジョイントリサーチプロジェクト）（2015/10/17～18)、大阪府。
④ Ertl John, Intersections of Diversity and Mobility in Japanese Archaeological Discourse, 17th International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences（2014/05/15)、 千葉県。
⑤Ertl John, *Dialogue: Contemporary Japanese Archaeologies*, 文化資源学セミナー「考古学と現代社会」第3回「現代『日本』考古学」 (2014/3/14)、 石川県。
⑥Ertl John, アメリカ人が語る御所野遺跡の価値と魅力, 御所野縄文博物館講演会(2014/03/08)、岩手県。
⑦ Ertl John, *Dialogue: How Will We draw Jomon People in the Future?*, 文化資源学セミナー「考古学と現代社会」第2回「歴史復元画と考古学」, (2014/1/25)、 石川県。
⑧ Ertl John, 考古学の多様性と縄文住居復元. (会議名：Seminar on Cultural Resource Studies, “Archaeology and Contemporary Society 1: Jomon Dwelling Reconstructions and Historical Parks.”)(2013/11/30)、石川県。

〔図書〕（計３件）
① Ertl, John, John Mock, John McCreery, Gregory Poole (eds.). *Reframing Diversity in the Anthropology of Japan*, Kanazawa University Center for Cultural Resource Studies, 2015, 265.
② Ertl, John and Paul Hansen. “Moving Beyond Multiculturalism as a Framework for Diversity in the Anthropology of Japan,” *Reframing Diversity in the Anthropology of Japan* Kanazawa University Center for Cultural Resource Studies, 2015, (1-28).
③ Ertl, John, “Traversing the Landscape and Boundaries of Japanese Archaeology: Ethnography of Archaeological Practices at Amenomiya Kofun,” *Reframing Diversity in the Anthropology of Japan.* Kanazawa University Center for Cultural Resource Studies, 2015, (29-63).

６．研究組織
(1)研究代表者
ERTL John Josef (アートル　ジョンジョセフ)
金沢大学・外国語教育研究センター・准教授
研究者番号：30507380